

言い聞かせている次第である。

無題

静岡県 山口 宗

シベリア五年間の生活を思い起こし、記憶によみがえってくるのは、昭和二十(一九四五)年十一月牡丹江を出てシベリアに入り、石炭云々で上官に顔を殴られ鼻血を多く出し、目のふちが黒くなる程、発熱して食欲ゼロ、ハバロフスク十一月二十五日。生ある限り忘れる事のできない日。

有熱患者は下車、五人降ろされハバロフスク病院に。歩行できず雪のちらつく実に寒い中、ジープで運ばれた。

ロシア語が通じず手まねで病院に入れられ、五人部屋は、満州人・朝鮮人ばかり。時に耳に入ったのが三人死亡したこと。あとは渡辺と自分だけと言われた時、俺は死ぬのだと直感した。氷で光る床を、やっと這いずりトイレに行く。朝食の黒パン・角砂糖はすぐに持ち去られ何も食はず。

しかし運よくレニングラード老シストラ（看護婦）が養命酒のような黒い水を小さいコップで私の口に入れてくれ、次第に元気になる。揚がってくる物を肢の中に入れて隠し、少しずつ食べられるようになった。後になって日本の患者も入るようになり、今村憲兵曹長・ハルピンの特務機関にいた人が来た。風邪をこじらしたということで、「特に俺は生きられない、この本をやるからロシア語を勉強しろ、きつと役立つ」と言われ、三十二文字の基礎より覚えた。

そのお蔭で、レニングラード老シストラが一人息子を独ソ戦で亡くしたことも分かる。今村曹長も亡くなり、満腔の感謝の気持ちで手を合わせ冥福を祈り、私の手で色々扱いをした。今でも「山口、いつか役に立つ」この言葉をハッキリ覚えている。

山口は病院で働くと命ぜられ、病院がハバロフスクよりホールニカ所に移動する時も患者輸送だった。その間千人を超える同僚を葬った。朝・夕、

飯を持って床に行けば動かず、栄養失調そのものだった。

二十二年六月ヤポニーダモイと言われナホトカに來た。たしかに病院船・引揚船を目の前に見たが、ダメだった。壁塗り、薪切りで一年。二十三年になり山口はロシア語ができるから、ウオロシロフ（マツセルスカヤ）被服の修理工場に四十人連れて行けと言われ、奥地に引き返しガツカリした。当時は、何回も駄目で故郷日本もあきらめる位の心境だった。しかし二十四年十一月十八日、新しい着衣、ヤポニーダモイと言われて、またもしやと思いつながら凍ったウスリユー河を五列で、最終船「信洋丸」八、〇〇〇トンに乗り込み、黒髪の日本の女子を見て、今度は帰れるかと高いところで誰にも分からず、涙が少し。ただ今も思う、今村曹長の故郷を聞かず、心の痛む今日この頃です。立派にあの五年間の苦難を乗り越え生還できたのも故人今村さんのお蔭と、今も自宅の過去帳に書き、毎日線香三本、花はもちろん、水、新し

く炊いた飯を供え、祖先同様に心に念じて冥福を祈っている。

マア生還できたのもロシア語の勉強が一大勝因の一つかなあ、と。

勝者と敗者

熊本県 入江 司

昭和二十(一九四五)年八月十五日終戦、ハルピンで武装解除され、だまされた挙句の果てシベリアに抑留されるまでの間、初めて経験する敗者の惨めさをいやという程味わされた。その中で、横道河子から梅林までの行軍中特に忘れられないのが二つある。

その一つは……我々がまだ日本に帰れると思いつながら黙々と行軍している途中で、多分開拓団から命からがら逃げて来たと思われる婦人が、髪を短く切り、顔はすすけて黒く汚れ、疲れきった小さな子供を両手に握り、我々の隊列をじっと見つめていた姿が今でも心の奥に強く残っている。

時々、中国残留婦女子の記事や写真が新聞・テレビで出る度に胸の詰まる思いである。

もう一つは……横道河子から梅林までの行軍の